

序

1969年、吉川春寿先生は定年によつて東大医学部教授を退官され名誉教授となられ、栄養女子大学に移られました。

昭和8年東大医学部ご卒業、医学部生化学教室で故柿内教授に師事された後、公衆衛生院を経て東大医学部生化学の助教授として赴任されたのは戦争中の一番苦しい時期でありました。カーキ色の長いガウンをひきづる様に髪はぼさぼさのまま長身を持てあます様な格好で教壇にたたれた第1回の講義をよくおぼえております。

その頃からすでに吉川先生は広いレパートリーをお持ちになつていました。生化学教室でのご興味を中心は、高エネルギーリン酸結合やらヌクレオチド、糖リン酸化化合物を中心に吸エネルギー反応だつた様子で、しかもこれを反応そのものとしてでなく、生物の中での位置づけ、つまり生理的意義を中心に理解されていた様です。たとえば精子のリン酸代謝や、精子のエネルギー源、糖代謝の研究がそれでした。この延長は後に赤血球に移り各方面に発展していく事になります。

公衆衛生院の故佐藤徳郎博士の解毒の研究をご指導になり、栄養学教室の芳香族アミンの解毒機構に関する研究なども含めて公衆衛生的見知からこの様な日の当たらぬ分野の重要性を認め、この分野に人々が少ない事をなげかれて、私にも赤血球の研究のかたわら、これらの研究を放棄しない様にとご忠告をいただいた事があります。

先生の博士論文は無銅培地に生育した酵母のチトクロームという事で、この研究は、鉄、銅、亜鉛の代謝、cytochrome b_5 の発見、ヘムタンパ

クの構造、代謝生合成の研究に発展し、先生の御業績の重要な部分をなすものです。

栄養学教室の初代教授となられたのも、先生が臨床生化学に深い知識と関心を示されていた事も理由の一つとうかがつていますが、この方面の著書もおありでしたし、臨床方面の各学会で幾分啓蒙的な講演に始終追ひ廻されておられた様子でした。「栄養学といつても細胞栄養学だ」などと若い私どもは他方からの批判に対して栄養学教室でやつていた生化学的実験を弁護していましたが、先生もこれに同調されながら、一方では、食物を中心とした栄養学にも手がけられておりました。きわめて多彩な活動であつたと申せましょう。

これらが縦糸とすれば横糸に関するご興味も強く、生化学者あるいは栄養学者としての先生の像に厚味と立体感を加えています。

たとえばこれらの研究に用いられた方法についても、特に単なる手段として以上に手段そのものの体系がもつ価値に注目されておりました。戦争直前米国で学ばれたアイソトープ実験法は今でも先生の一門の研究法としてきわめて特徴のある方法となつているばかりでなく、本邦の放射性アイソトープ実験法の普及のために非常な尽力をなされ、功績がおありになります。

また定量手技に関しても鋭い評価をしておられました。

公衆衛生院時代に労働科学を手がけられた事もあつて臨床検査の重要性をつとに認識せられ、臨床分析化学の権威でもありました。この様な地味な仕事が生化学の体系からは評価されにくい

という理由から、われわれ若いものの中にもすれば軽いものと考える傾向がありがちなのを強くいましめておられました。臨床検査業務の困難さと重要性について恐らく誰よりもよく認識されていた生化学者の一人という事ができましよう。

先生の指導の仕方には一定の型はありませんでした。いわば、弟子達が自由に discuss する場所を作つていただいた形で、勝手に集り勝手に仕事をするものを巧みに誘導していかれるというご指導でした。これは非常な理解力と洞察力がともなっているためにできる事です。或る実験結果に関して私も自分の解釈が教室中の反対に遭いながら、先生だけが理解を示していただいたので心から感謝した経験があります。評価がただしく建設的に行なわれるという事はいうまでもなく指導者としての特質です。そればかりでなく、同時に来る者はこばまずといった寛いお心持もあずかつて力があつた様です。この論文集の中にも幾つか一見今までのびてきた流れとは関係の少ないテーマで直接ご指導ご助言をいただいたものも含まれている筈ですし、またいわゆる師弟の関係のない方にも助言を惜しまれなかつたので、深く感謝の念をいだかれておられる方々が多いのです。直接、先生の教室に学ばせていただいたものだけでなく、先生に近かつた人々のお仕事も、一緒にして先生に捧げさせていただくのは十分深い理由があると思ふものです。

これらの研究活動の他に、教育の問題についてもいろいろな抱負をお持ちになつていました。

「僕は研究者というよりは教育者だ」といわれた事があります。重要な時機に医学部長をつとめられたのも、広義の教育に対して広い視野をもつておられた事によるのでありましよう。生化学の将来、栄養学の将来などについても多くの見解をもつておられます。随分と多くの事で啓発していただいたと思うのです。

生化学は今、大変な時代にさしかかつている様に思われます。初期の static な分析時代と、dynamic な代謝パターン完成時代、さらに高分子の生化学と代謝調節の時代を経て多方面に立体的に末ひろがりになりつつあります。

丁度先生が予見された事が今実現の端緒についてと思われるのです。

ここに先生が如何に広い領域に興味をもたれ、その中に如何に鋭い見通しをもつておられたか、それがどの様に開花しつつあるか、将来またどの様に発展するかを知るために同志相集まつて総説集と致しました。普通にはない計画だと思いますが、この形式がもつとも先生の足跡を記念するにふさわしい方法の一つと思われたのです。うけていただければ幸いです。

昭和45年3月

記念論文集世話人代表

中 尾 真